巻頭言

地球をキャンパスとした大学教育

今年の９月１日から７日までの１週間、本学は上海万博において「中部大学週」なるイベントを開催した。このイベントは国際機関の一つである国際情報発展機構（ＤＥＶＮＥＴ）の招請を受けて本学が単独で取り組んだ国際的な産官学連携活動であり、全学挙げての国際展開であった。中部大学週は、本学がこれまで蓄積してきた研究の成果を広く開示し、新たな産学官の連携活動の展開だけではなく、これからの大学教育を国際的にどう展開し、国際的な人材の育成をどう図るかについても模索する貴重な機会となった。

この国際教育活動については２つの装置を用いて検討した。１つは、本学が学術交流協定を提携している中国、韓国、タイ、インドの10大学の学長によるパネル討論会であった。ここでは、「持続可能な開発に関する教育研究のあり方を探る」をテーマに、各大学長からそれぞれの大学の状況と、この課題に関連した教育実態について報告し合い、お互いの理解を深めたうえで、今後の連携について討論した。今後、10大学は協働して新しい教育プログラムを開発し、運営し、国際人を育成しよう。そのために、この様な学長サミットを続け具体化を図ることにした。この提案校としての本学は、本学の国際教育活動の未来形としてもこの課題を多面的に研究し積極的に提案する責任を背負ったことになる。もう一つは、２つの国際シンポジュウムであり、国境なき環境人材の育成を目指した教育カリキュラムの構築とその教育実践のための基盤整備について具体的に検討した。これらのシンポジュウムにより、本学がすでに進めているアジア環境人材育成事業の成果を基に国際的な連携体制を一層強化する道筋を明らかにした。

ところで、今年の７月７日に、中央教育審議会大学分科会グローバル化検討ワーキンググループは、「わが国の大学と外国の大学間におけるダブル・ディグリー等、組織的・継続的な教育連携の構築に関するガイドライン」を取りまとめ公表した。ここでは、学生がより短い期間、少ない経済的な負担で複数の大学からの学位を取得できるとともに、安心して学業に専念し、国際的な経験を積むことが可能となるなど、流動化の促進につながる効果が期待されている。また、大学にとっても他大学と国際教育連携を通して教育内容を充実するとともに、国際的な視野をもつ人材を育成するなど、大学間の交流促進と国際競争力の向上につながる効果が期待されている。ダブル・ディグリーやジョイント・デグリーといった学位を大学の国際連携の中で授与することは、環境や資源・エネルギーといった地球規模で捉えなければならない課題を将来的に解決する人材教育の目指す有力な方向であろう。この教育活動は人的かつ物的な資源の限られた一大学のなせるところを大きく超えているといわざるを得ない。自前主義の限界であり、連携協力というネットワークを構築することによって、時代と社会

が求める国際的な人材の本格的な育成が可能になると私も納得している。大学は地球をキャンパスとして開いた系で、あらゆる知的な活動を起こし、未来と世界に開いた人材の育成に本腰を入れる時期であろう。なぜならば今日の困難な課題はその多くが地球規模で起こっており、その解決には未来志向と地球人類の視点が必要であるからである。

国際的な活動もその第一歩は足もとの教育活動の充実であり、構成員による課題・問題意識の共有と多様な実践活動の推進が要となろう。本学の諸活動の実績を踏まえた研究成果を取り入れて、「中部大学教育研究」10号を公表することにした。今年度版は、２本の特別寄稿と３本の研究論稿、そして11本の教育実践資料を主な論文として掲載しています。特別寄稿はいつもながらの本学客員教授の寺﨑昌男先生と田中毎実先生にお寄せいただきました。厚く御礼申し上げます。また、編集を担当されました坪井和男中部大学学監、教育研究センター長を始め関係者の皆様に対して感謝いたします。

2010年12月

学 長　山 下 興 亜